

道徳教育とアセスメント

— 道徳教育を充実させるためのアセスメントの工夫 —

武庫川女子大学 押谷由夫

要旨

教育にエビデンス（確証）が求められている。

道徳教育の充実が叫ばれ、「特別の教科 道徳」が全面実施されるにあたり、道徳教育の取り組みや成果は見えにくいといわれるが、だからこそ、計画レベルにおいて、また結果において、様々な関係要因を「見える化」することが大切である。それらを実践（状況把握査定）という視点から追求しようとするのが本稿である。道徳教育は教育の中核であることを念頭に置き、ここでは大きく「道徳教育の目標追究を支える3つの根本力のアセスメント」「道徳性を構成する諸様相の3つの根本力のアセスメント」「日常生活での行動に関するアセスメント」「学級の成長と道徳的風土に関するアセスメント」「道徳の授業の取組に対するアセスメント」という5つの側面から提案する。

道徳教育を充実させるためには、アセスメントが不可欠である。ではどのようなアセスメントを考えればよいのか。基本は道徳教育、「特別の教科 道徳」の目的と方法から道徳教育を充実させるためのポイントを押さえることである。

（1）道徳教育の目標追究を支える3つの根本力のアセスメント

学習指導要領では、道徳教育の目標について次のように記されている。「自己の生き方（人間としての生き方）を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者とともによりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」（()は中学校）である。

そのために、押さえなければならない最も根本的な力として3つを指摘することができる。

一つは、自分を見つめる力である。その見つめ方は、道徳教育の要である「特別の教科 道徳」の目標において「道徳的価値の理解をもとに」と書かれている。つまり人間らしさの基本である道徳的価値に照らして自己の生き方を見つめるのである。

二つは、相手（人間だけでなく様々な対象）の立場に立って考える力である。「主体的な判断の下に行動する」ことが「他者とともによりよく生きる」ことにつながるためには、常に相手の立場に立って考える姿勢を持つことが不可欠である。「特別の教科道徳」の目標にある、「物事を多面的・多角的に考える」には、自分の立場からだけではなく、常に相手の立場に立って（その状況に入り込んで）考えることが求められる。

三つは、自分を肯定的にとらえ、自分や社会の未来を拓いていこうとする力である。自分を見つめる力や相手の立場に立って考える力は、よりよい自分づくりやよりよい社会づくりへと向かわなければならない。そのよりよい自分や社会を拓いていこうとする意欲や向上心を常に持っていることが大切である。例えば自分を低く見つめていたとしても、他から学び自分を向上させようとする意欲を持っていればよりよい自分を創っていくことができる。

この3つの力がどの程度かを把握するアセスメントが必要である。

（2）道徳性を構成する諸様相の3つの根本力のアセスメント

道徳教育は、道徳性の育成を図るものである。道徳性のとらえ方はさまざまであるが、一般的には、道徳的な生き方や行為を可能にする内面的資質であると同時に、外面に現れた道徳的な生き方や行為を一体的に捉えて道徳性とみなす。例えば、挨拶をしたり、困っている友達に声をかけたりしている子どもは、道徳性が育っていると評価される。その場合、表情や仕草から内面も育っているとみなされる。

「特別の教科 道徳」の目標には、「道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」と記されている。道徳性の諸様相には、さまざまなものが考えられるが、その根本力として、道徳的な知、情、意の部分あげているととらえられる。したがって、道徳の授業を充実させるためには、指導する内容（道徳的価値）に関わって「道徳的な判断力、心情、実践意欲や態度」がどのような実態にあるかを調べておく必要がある。そのことによって一人一人の指導課題と同時に、成長を見取る視点が明確になっていく。

道徳的判断力は、「善悪を判断する能力である」と言われるが、今日ではその基準が曖昧である。いわゆるグレーゾーン（善くはないが悪くもないといったもの）も増えている。そのことを考えると、様々な状況において、人間としてどう対応することが望まれるか（つまり道徳的価値に照らしてどう対応することが望まれるか）を判断する力、といった方が

適切であると言えよう。

また、道徳的心情は、「善を行うことを喜び、悪を憎む感情のこと」であるといわれる。このこともなかなか把握しにくい。道徳的判断力と関わらせてより分かりやすく言えば、人間らしさの根本である道徳的価値に照らして、望ましいと思われることに対してプラスの感情をいただき、このようなことがもっと広がっていけばいいのになあと思う心の動き。逆に、望ましくないと思われることに対してマイナスの感情をいただき、こういったことがなくなるといいのになあ、改善されるといいのになあ、と思う心の動き。ととらえられる。

さらに、道徳的実践意欲と態度は、「道徳的判断力や道徳的心情によって価値あるとされる行動をとろうとする傾向性である」といわれる。この道徳的実践意欲と態度は、すぐに道徳的実践へと結びつくわけではない。道徳的実践へとつなげて行くには、さらなるパワーが必要になる。それは、目標意識であったり、義務感であったり、向上心であったり、決意であったりする。そのようなことを踏まえながら、道徳的実践意欲と態度の育成を図る必要がある。

道徳の授業を充実させるためには、このような道徳性を構成する3つの根本力の実態を把握しておく必要がある。このアセスメントをもとに、一人一人の課題を明確にしながらか、授業を構成していくのである。

なお、これらの3つの根本力は、相互にからみあっている。授業においては、本時のねらいにかかわって、多様に意見が出てくるように問いかけや授業方法を工夫するのである。子どもたちから出てきた意見や考え方、感じ方や様々な表現は、どれもが価値あるものである。それらを存分に引き出しながらか、一人一人の意見や考え方、感じ方や様々な表現から成長を見取っていくのである。それが、子どもたち一人一人への評価ということになる。

(3) 日常生活での行動に関するアセスメント

道徳教育は、自律的に道徳的実践のできる子どもたちを育てることを目指すが、では、道徳的実践をどうとらえればよいのか。道徳的実践とは、道徳的価値に基づく実践ということになる。指導要録の行動の記録は、主に道徳教育の行動面に現れた成果を評価することになっている。項目としては、小学校、中学校共に「基本的な生活習慣」「健康・体力の向上」「自主・自律」「責任感」「創意工夫」「思いやり・協力」「生命尊重・自然愛護」「勤労・勤勉」「公正・公平」「公共心・公德心」が挙げられている。いずれも道徳的価値が評

価項目になっている。

では、道徳的価値に基づく実践をどのように把握するのか。その際、道徳の指導内容に着目する必要がある。道徳の指導内容は、4つの視点によってまとめて示されている。4つの視点とは、かかわりを意味する。つまり、「自分自身、人、集団や社会、生命や自然、崇高なもの」である。そして、それぞれのかかわりを豊かにするために必要な道徳的価値や心構えが発達段階に応じて内容項目として示されている。

つまり、道徳教育が目指す道徳性の育成は、内面的な道徳的価値意識だけではなく、実際の生活や様々な学習場面において、「自分自身、人、集団や社会、生命や自然、崇高なもの」とのかかわりを豊かにすることを求めているのである。そのことから、道徳的実践とは、道徳的価値意識をはぐくみながら日常生活や様々な学習活動において、これら4つのかかわりを豊かにしていくことなのであるととらえられる。それぞれの道徳的価値意識がどのようなかかわりを豊かにしていくのかを考えて実態を把握することによって、具体的な成長の姿と課題が見えてくるといえよう。

(4) 学級の成長と道徳的風土に関するアセスメント

道徳教育の場は、子どもたちの生活する場全体である。意図的に道徳教育を行う最も基礎的な集団は、学級である。道徳教育が目指すのは、よりよい自分づくりとよりよい社会づくりができる子どもたちである。一人一人の道徳性をはぐくむことは、4つのかかわりを豊かにしていくことであることから、当然に学級集団全体が成長しているかどうか問われる。そして同時に、学級全体が温かな心の交流がなされるようになっていることが求められる。それは道徳的風土とってよい。

これらをどのように把握すればよいのか。大きくは、互いの信頼感が形成されているかということと、ともに成長しようとする自律心が育っているかどうかである。

信頼感の形成は、大きく二つの指標でみることができる。一つは、互いが認められていると感じていることである。心を通わせ信頼感を形成するには、相互に自己開示を深めていくことが大切である。互いが認められ何でも言える雰囲気がまず求められる。

二つは、支え合い助け合えることである。学級の一人一人に気をかけながら、困っていれば声をかけてあげよう、手助けしてあげようとする気持ちを共有し、実行していることである。そのことによって相互の信頼感は増し、一人一人を大切にしたい学級になっていく。

そして、さらに、相互に切磋琢磨し、よりよい自己と学級を目指して高め合おうとしているかどうかである。そのことによって、学級の成長と個人の成長が同時に図られていくことになるといえよう。

これら3つの側面から実態を把握し、課題を見出し、その対応を考えていく必要がある。

(5) 道徳の授業の取組に対するアセスメント

以上の4つのアセスメントは、「特別の教科 道徳」を要として学校教育全体で取り組む道徳教育の成果と密接にかかわっている。そこで、道徳教育の要としての「特別の教科 道徳」の授業が、どのようになされているかの実態把握が必要である。道徳の授業では、「道徳的価値の理解」と、「自己を見つめる」ことと、「物事を多面的・多角的に考える」ことが絡み合って心に響く授業が行われ、一人一人が「人間としての自己の生き方について考えを深める」ことを目指されている。

そのために特に「読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」「問題解決的な学習」「道徳的行為に関する体験的な学習」が提案されている。さらに「考え、議論する（対話する）」授業が求められている。それらをどのように工夫しているか。そのことによって「特別の教科 道徳」の目標に沿った効果が上がっているかを見してみる必要がある。

この5つのアセスメントの結果を見ながら、道徳の授業の取組に対するアセスメントが、他の4つのアセスメントとうまく響き合っていくように、道徳の授業と日常生活や他の教育活動との連携を工夫する必要がある。例えば、学級目標と関わらせて道徳の授業と学級活動や朝の会や帰りの会と連携させる工夫。道徳ノートを活用して授業後に取り組んだことや気づいたこと、考えたことを記入していく工夫。教材等を掲示して授業で話し合ったり考えたことを意識させていく工夫。さらに発展させて、総合的な学習の時間と連携したプロジェクト型の道徳学習や、関連する教育活動と密接にかかわらせた総合単元的な道徳学習を工夫していくことが求められる。